「M 情報デスク」サポート団体
救う会大阪　NO！民主桜組
米国に原爆投下謝罪を求める会
大阪の公教育を考える会
スパイ防止法の制定を求める会
外国人参政権に反対する会・関西
日教組の違法行為を追及する市民の会
竹島を奪還する会・関西
靖国神社に眠る御霊に感謝する会

MASUKI INFO. DESK FIGHTING REPORT

関西より発信！

No. 143
【発行・編集】
MASUKI情報デスク
増木直美
大阪府豊中市上新田2-6-25-113
TEL　090-3621-1509
FAX　06-6835-0974
http://mid.parfe.jp/
mid@jewel.ocn.ne.jp

中山成彬元文科大臣、歴史を講義ス！

3月8日午後1時、衆議院予算委員会
中山成彬先生の質問がありました。右後方に座っているお姉さん。**しっかり聞けよ！**　マスキ

---最初の10分くらいは景気問題------略

中山成彬議員
「実は国際的に日本の子供たちがいじめられている話を今日はしたいんです。いま日本の留学生がアメリカやカナダで、中国・韓国の留学生に『あんたたちの祖先から自分たちの祖先は酷い目に遭った』と迫られ、肩身の狭い思いをしている。そういう話を聞いたことがありますか?」

下村博文文科相
「我が国の子供たちは日本の歴史・文化・伝統を知らない。真の国際人は真の日本人であるからこそ、諸外国の人たちともきちっと話すことができる。外国に行ってみたら自分の国のことを知らない。そのために反論できない。いじめられるというよりは、多くの日本人が留学して、自分がいかに日本を知らないかを痛切に感じ、改めて日本の勉強し直す。日本の教育を変えてほしいという話をたくさん聞いているし、指摘もあると思う」

中山成彬議員
「中国・韓国は常に『歴史を直視して、未来志向で』と言う。今日は歴史を直視するとはどういうことかを考えてみたい。日本の台湾や朝鮮の統治は、欧米の略奪だけの植民地主義とは違っていた。学校などインフラを整えた。台湾では八田技師が大変な灌漑事業をやった。ちょうど出くわしたことがあるが、5月8日には地域住民が集まり、八田の徳を偲んでいた。朝鮮でも同じようなことをしていたことを、理解してほしい」

中山成彬議員
「京城に地下鉄という新聞記事が。東京で一番古い地下鉄の銀座線、浅草−渋谷が開通したのは1939年。1940年にはもう京城に地下鉄ができた。日本が韓国の近代化にいかに熱心だったかが分かる。昭和12年時点で朝鮮の国鉄・私鉄あわせて5000キロの鉄道できていた。昭和20年までにはさらに1000キロ延長。明治32年、1899年、わが国が京城と仁川の間に鉄道敷くまで、鉄道はなかった。鉄道網を短期間につくった。左の写真は京城帝国大学。大阪帝国大学より7年早く、名古屋帝国大学より15年も早く建てられた。併合時点では公立学校は100校しかなかったが、昭和5年で1500校、昭和17年には4271校を設置した。しかも鉄筋コンクリート、煉瓦造り。日本というのは、台湾もそうだし、朝鮮にも内地と同じような統治をした」
「創氏改名は朝鮮人が望んだと麻生さんが東大で講演し、朝日新聞でたたかれた。現在、使われている検定を通った高校日本史の教科書3つで、創氏改名を強制したと書いてある。しかし、氏の創設は自由だ、強制と誤解するな、総督から注意を促すという当時の朝日新聞記事がある。内地式に変更、締切後も変更できますという記事も。決して強制ではない。創氏改名に殺到しているソウル市民という写真記事も。平成15年に麻生さん発言した時は、これら知らなかったでしょ?（麻生副総理、うなづく）今どう思いますか?」

麻生太郎副総理
「日韓関係に齟齬を来すということで私の方からその後、記者会見で、こういった話で韓国の方々に不愉快な

【パネルを使って説明】

「M 情報活動報告」編集指針；政治や国際問題、市民活動に全く無縁だった一般の人達に、「おばちゃん語」で政治を届ける

思いをさせたとお詫びしたと記憶しています。個人的な認識をいま改めて言うのはいかがなものかと思うが、いまは閣僚なので個人的見解は差し控えさせていただきます」

中山成彬議員

「下村大臣、教科書検定は事実に基づき行われるべきだと思います。3つの教科書、明らかに間違ってますよね。これで学んだ学生が大学入試で、創氏改名は強制と答えた場合、これは○か×か？　大きな問題になる。本来であれば回収すべき。あるいは、これを使ってる学校へ正誤表を配布するなどしてもよいのでは？」

下村博文文科相

「現在の教科書検定では学習指導要領に基づき、教科書検定審議会の学術的、専門的な審議に基づいて行われ、申請図書の具体の記述について、その時点における客観的な学問的成果や政府見解、適切な資料等に照らして、欠陥を指摘するものです。これが欠陥かどうかは、日本史大事典、国史大辞典というところでも強制したという記述が表現されている中、教科書検定においては、これは欠陥には当たらないと判断されているところです」

中山成彬議員

「そこを政治主導で、間違いは間違いとちゃんと訂正すべき」

中山成彬議員

「午前中に（質疑で）辻元清美議員がいろいろ言ってた、いわゆる従軍慰安婦問題。官憲が介入したと誤解させた最初の記事は平成4年の（朝日新聞の）『慰安所軍関与示す資料』。ところがよく見ると、悪徳業者が募集に関与しているようなので注意するようにという通達で、全く逆なんです。当時の朝鮮の道議会選挙、当選者の8割以上の人が朝鮮人。忠清南道の知事は初代、6代、8代、9代、10代、昭和20年に至るまで全部朝鮮人。他の道も同じようなものでした。この大田警察、ナンバー2の警部、高等刑事も朝鮮人。このような体制で、官権の強制連行は考えられないんじゃないですか」

中山成彬議員

「いま慰安婦問題が世界に広まってる。ソウルの日本大使館の前に慰安婦とされる少女の像が。アメリカでも朝鮮人の多いニュージャージー州に像が建てられ、高速道路には大きな看板が出て、日本軍が女性を20万人性奴隷をしたと。日本人にとって屈辱。こういうことをさせてはいけない。だいたい20万人もの女性をさらっていく、その親たちは黙って見ていたのか。まして、日本の兵隊さん、世界一軍律が厳しいと世界から賞賛された。もちろん日本が遅れて列強の仲間入りをしたから良く見られたいこともあったろうが、根底にあるものは武士道だったと思う。立派な戦いをしたのに、こういったことで侮辱されている。看過しがたい。安倍総理のお答えは入れないが、ぜひこういうことを皆で分からないといけない」

中山成彬議員

「官憲が強制連行したのではなく、これは1枚だけ東亜日報だが、あとは全部、当時の朝日新聞。朝鮮人が日本人の良家の子女を誘拐して満州に売り飛ばしたと。農村の娘に毒牙とか。警察がしっかり仕事をしていたことが分かる。日本人が何かやったというのは、調べても調べても出てこないんです。戦前の日本は貧しかった。慰安婦にならざるをえなかった女性がいっぱいいたことを私は知ってる。いかにも朝鮮人だけが従軍慰安婦にされたとか、誤解を解いてもらいたい。午前中に辻元議員が出したが、各国で慰安婦に関する決議がなされていると。朝鮮の方は粘り強いというか、しつこいというか、すごいなと思うが、こういうことがずっと蔓延しているのは自民党にも責任ある。歴代の外交が、その場しのぎで、謝ればそれ以上追及しないという言葉に乗せられて、談話等が出された。そのツケが全部いま来ている。日本人は惻隠の情や、人を騙してはいけないと小さい頃から教えられるが、しかし、騙されるほうが悪いんだと、嘘も100回言えば本当になると、プロパガンダに励んでいる国民もいることを忘れてはいけない。我々はそういう意味で、国際社会でダブルスタンダードで生きていかねばならない。総理にはあえて答えはいらないことにしておきます」

中山成彬議員

「先の戦争は侵略戦争だったと思い込まれているが、1951年、マッカーサーは米国議会の上院の軍事外交委員会で、『日本は米国によって閉じ込められ、資源供給の道を断たれた。日本が戦争を始めた目的は、主として安全保障の必要に迫られてのことだった』と明確に、侵略戦争を否定している。このマッカーサーの発言を東京都では副読本で使っている。これを全国の公立学校に配布してはどうか」

下村博文文科相

「このような地域で作成した教材のうち、優れたものは他の地域でも活用されることは大変有意義。文科省として各都道府県の教育委員会などの担当者を集めた会議などを通じて情報の共有化を図っていく」

中山成彬議員

「いま私たちは、子供たちがどういう教科書で習ってるのか調べることは困難。平成9年、安倍総理も、亡くなった中川昭一先生などと一緒に、日本の前途と歴史教育を考える議員の会をつくった。あれは最初、中川昭一先生が自分の娘の教科書を見たらとんでもないことを書いてあるので、これはいけないというので、教科書議連をつくって活動した。いまはもう中学の歴史教科書に、いわゆる従軍慰安婦という言葉がなくなった。良かった。ぜひ、日本でいま使われてる検定教科書を見られるように、文部省のHPに全部出してほしい。中韓はすごい反日愛国教育をしている。中国からもいっぱい入って来てる。彼らがどういう教育を受けてるか知っておいた方がいい。中韓の教科書もHPに載せてほしい」

下村博文文科相

「日本の教科書を広く国民に、HP含め、より情報を提供するのは重要で、しっかり対応する。ただ、他国の教科書等を掲載するのは著作権の問題、その時の政治的、外交的な判断もあるので、できたら民間等でお考えになっていただければありがたい」

中山成彬議員

「尖閣列島の地図、上の地図は外務省HPにあるが、下の地図（『世界地図集第一冊東亜諸国』1965年・国防研究院・中国地学研究所発行）はまだ載っていない。台湾が発行したもの。これも外務省のHPに載せてほしい。はっきりと尖閣列島は日本の領土だと明らかになっている。　日本維新の会は教育問題に一生懸命取り組んでいる。集中審議をお願いしたい。その時に、朝日新聞の関係者にもぜひ来ていただきたい。委員長にお願い申し上げます」

ブログ「ぼやきくっくり」より転載

中山成彬先生ブログより　3月13日

早く自虐教育をやめさせないと

去る3月8日の私の国会質問がネットで騒がれているようだ。NHKがYouTubeの画面を削除したというので更に騒ぎが大きくなっていると聞いた。私は中国や韓国が「歴史を直視して未来志向で」という決まり文句に我慢がならない。これは、日本が侵略国で中国や朝鮮に多大な被害をもたらし、従軍慰安婦や南京事件は実在のものであるということを確定した上で、だから日本は永久に中国や朝鮮に謝罪し続けなければならないという事を言いたいのだ。

これらのことを捏造したのが日本の朝日新聞であり、拡げたのが日教組であり、情けないのは、それを許したのが自民党であるという事だ。私は、日本維新の会の議員として質問に立ったが、自民党ではなかなか言えないことも言えたという意味で、私が維新の会にいることの意味もあるのかなと思う。今回は、創氏改名と従軍慰安婦の問題を取り上げ、創氏改名は強制では無かった、朝鮮女性を強制連行した事実は無かったと、当時の新聞記事等の一次資料を使って証明した。

実は南京事件についても、今から4年前、「日本の前途と歴史教育を考える議員の会」の会長として、当時の一次資料を徹底的に調べて「南京事件は通常の戦闘であり、それ以上でもそれ以下でもなかった」と結論づけた。そして「南京の実相」という本を出版し英訳してアメリカの上下両院の議員全員にも送付した。

調査で特に印象深かったのは、橋の上を歩く中国女性達の前後を日本兵が銃を担いで守っている写真であった。アサヒグラフの原画をみると女性達は笑っている。これを薄暗くして表情が分らないようにして、「The Rape of Nankin」や南京の抗日記念館で従軍慰安婦として強制連行している証拠写真としていたのだ。当時の中国内は軍閥や匪賊が出没し一般人を苦しめており、日本軍が占領した地区の住民は安心して暮らしていたのだった。なおこの写真は本の出版後、南京の抗日記念館から消えたという話もあるがこの目では確かめていない。次に質問の時間をもらえたらこの南京事件についても「直視」してみたい。アサヒグラフの写真など資料は沢山ある。

それにしても、最近の話だが、高校の時、修学旅行で中国に連れて行かれ、南京の抗日資料館を見学した後、現地の高校生と交流会があり、中国の高校生に英語でこてんぱんにやられたという女性の体験談を聞いた。真の歴史を教えられず、英語の不得意な日本の学生達が中国の学生達に頭が上がらなかったのは当然だ。中国や韓国に子供達を連れて行き、残虐記念館を見せ、「自分たちの祖先は中国で悪いことをした、中国の人は可哀そう」という反省文を書かせる教師達は子供達の将来を考えているのだろうか。子供達が社会に出て、反日愛国教育で鍛えられた中・韓の子供たちに相対した時に気力で負けるのは当たり前だ。もう遅いかも知れないが、一日も早く、この自虐教育は辞めるべきだ。

そして、安倍総理の言う「日本人として自信と誇りを持った子供達を育てる」という一項目を教科書検定の最初に置くべきではなかろうか。更に言えば、歴史教科書は国定教科書でいいはずだ。同年代で日本の歴史を語り合うとき、意気投合できてこそ日本人としての一体感が生まれるというものだ。

議会活動等のレポート

私立高校研究会に参加

名古屋市議会議員　うさみいく愛
うさみ議員3月27日HPより

3月9日、「NPO法人百人の会」主催大阪の私立履正者高校福留光明先生の講演会に出席！

大阪府ナンバー1の授業料が安い商業高校から今では名門校になった私学高校の実態の勉強会に行ってきました！

何とたった一人の熱血先生の諦めない信念であったことを知りました。やはり教育を変えるのは、熱血先生何ですね。

一人が二人、二人が三人へと変わり、落書きしかしなかった子ども達がちゃんとついてきてくれたそうです。高校の授業料無償化で、子ども達は経済面での心配をしないで選択できることになり利益を得ることができますが、経営者側の学校にとっては授業料免除という名でよい生徒を集められる特待生制度が活用できなくなるため、本当の意味でのその学校の真意が問われることなり、厳しい状況に追いやられる学校も少なくない思われます。

伝統を学び現代に生かす！伝統的教育の再興と推進について考える

箕面市市議会議員、武智秀生議員
機関紙より

近年益々過激化しているいじめや体罰死、暴走、荒廃の一途をたどる学校現場、形骸化し機能しない教育委員会、このような教育のあり方に、我が国は大きな節目に立っていると思われます。マスメディアを通し、有識者や文化人の間で日々様々な議論がなされていますが、このような状況に陥った原因を私は追究するべきであると考えます。我が国は、少なくとも戦前までは、世界有数の教育水準を維持してきました。礼儀、礼節、弱者へのいたわりは勿論のこと、勤勉、実直な民族でした。1585年に来日したルイス・フロイス(イエズス会宣教師)は、我が国の子供達の立ち振る舞いや礼節を見て「完璧だ!」と感嘆されたそうです。近代史に至っては、我が国の教育文化は富国強兵を成功させ、欧米に決して劣らない近代国家へと導きました。しかし、戦後の我が国は、生活水準が向上し、物資も豊かになりましたが、これまで構築してきた素晴らしい文化や伝統、そして民族としての魂まで、歴史を遮断するかのように、自由や権利ばかりが主張されるようになりました。かつて、人材育成の神様と謳われた海軍大将山本五十六元帥は、『やってみせ言って聞かせてさせてみてほめてやらねば人は動かじ』という格言を残しています。

時代を超えた現代でも十分に通用する不変の英知であり、今こそ学校教育の現場で活かすべきと考えます。我々は何を学び、未来ある子供達とどのように向き合っていくのか、今後早急に取り組まなければならない重要課題であると確信しています。

皇后陛下のご講演

日心会メルマガH25-2-18　より

皇后陛下のお言葉をご紹介させていただきます。

1998年に、ニューデリーで行われた第26回IBY大会での皇后陛下のご講演録です。みなさまにも是非、ご一読賜りたいと思い、今回、転載させていただきます。お読みになるとわかりますが、皇后陛下のお言葉のひとつひとつが、慈愛と感謝と謙譲の心に満ちていることに、まず感動されることと思います。そして実は、その皇后陛下が、まだ幼いころに、たいへんなご苦労をされてお育ちになられいたことに、驚かされます。そして私達は、人として、日本の国民として、親として、祖父として、何がたいせつなのかを、心に感じ取ることができます。

きっと、ご一読された方は、読後にご自身のお顔の表情が、なぜかやさしいものに変わっているのをご実感されることと思います。そしておそらく男性なら、ほんとうのつよさを身に付けた男になろう、いや、なろう、という強烈な意思が心の奥底からつよい衝動となってわき上がってくると思います。

女性なら、きっとわかちあう心、ほんとうのやさしさ、女性として、母として、生きること、育てることの意味のようなものを、熱い感動の中に、感じていただけるかもしれない。

そして、私達がほんとうに目指さなければならないこと。ほんとうにしなくてはならないことが何なのか、その姿が、自分の心の中にはっきりと見えて来ることでしょう。

第26回IBYニューデリー大会（1998年）基調講演

子供の本を通しての平和

《子供時代の読書の思い出》

皇后陛下　宮内庁ホームページより

第26回国際児童図書評議会（IBY）ニューデリー大会の開催に当たり、思いがけず基調講演者としてお招きを受けました。残念なことに、直接会議に参加することが出来ず、このような形でお話をさせて頂くことになりましたが、遠く日本より、この度のニューデリー大会の開催をお祝いし、御招待に対し厚くお礼を申し上げます。

大会の行われている印度の国に、私は沢山の懐かしい思い出を持っています。1960年、当時皇太子でいらした天皇陛下と共に印度を訪れた時、私は26歳で、生後9ヶ月になる一児の若い母であり、その13年前、長い希望の年月を経て独立を果たした印度は、プラサド大統領、ラダクリシュナン副大統領、ネルー首相の時代でした。

この方々のお話――自由と民主主義、平和への思い――を、心深く伺った日々、又、人々の歓迎に包まれて、カルカッタ、ニューデリー、ボンベイ、アグラ、ブダガヤ、パトナを旅した日々のことを、今懐かしく思い出しつつ、印度国際児童図書評議会によりとり行われる今大会の御成功を、心からお祈りいたします。大会のテーマである「子供の本を通しての平和」につき、私にどのようなお話が出来るでしょうか。

今から3年前、1995年3月に、IBYの印度支部会長、ジャファ夫人のお手紙を受けとったその日から、私は何回となく、この事を自分に問いかけて来ました。私は、多くの方々と同じく、今日まで本から多くの恩恵を受けてまいりました。子供の頃は遊びの一環として子供の本を楽しみ、成人してからは大人の本を、そして数は多くはないのですが、ひき続き子供の本を楽しんでいます。

結婚後三人の子供に恵まれ、かつて愛読した児童文学を、再び子供と共に読み返す喜びを与えられると共に、新しい時代の児童文学を知る喜びも与えられたことは、誠に幸運なことでした。もし子供を持たなかったなら、私は赤ずきんやアルプスのハイジ、モーグリ少年の住んだジャングルについては知っていても、森の中で動物たちと隠れん坊をするエッツの男の子とも、レオ・レオーニの「あおくん」や「きいろちゃん」とも巡り会うことは出来なかったかもしれないし、バートンの「ちいさいおうち」の歴史を知ることもなかったかもしれません。

トールキンやC・S・ルイス、ローズマリー・サトクリフ、フィリッパ・ピアス等の名も、すでに子供たちの母となってから知りました。しかし、先にも述べたように、私はあくまでごく限られた数の本しか目を通しておらず、研究者、専門家としての視点からお話をする力は持ちません。又、児童文学と平和という今回の主題に関しても、私は非常に間接的にしか、この二つを結びつけることが出来ないのではないかと案じています。児童文学と平和とは、必ずしも直線的に結びついているものではないでしょう。又、云うまでもなく一冊、又は数冊の本が、平和への扉を開ける鍵であるというようなことも、あり得ません。今日、この席で、もし私に出来ることが何かあるとすれば、それは自分の子供時代の読書経験をふり返り、自分の中に、その後の自分の考え方、感じ方の「芽」になるようなものを残したと思われる何冊かの本を思い出し、それにつきお話をしてみることではないかと思います。そして、わずかであれ、それを今大会の主題である、「平和」という脈絡の中に置いて考えてみることができればと願っています。

生まれて以来、人は自分と周囲との間に、一つ一つ橋をかけ、人とも、物とも つながりを深め、それを自分の世界として生きています。この橋がかからなかったり、かけても橋としての機能を果たさなかったり、時として橋をかける意志を失った時、人は孤立し、平和を失います。この橋は外に向かうだけでなく、内にも向かい、自分と自分自身との間にも絶えずかけ続けられ、本当の自分を発見し、自己の確立をうながしていくように思います。

私の子供の時代は、戦争による疎開生活をはさみながらも、年長者の手に護られた、比較的平穏なものであったと思います。そのような中でも、度重なる生活環境の変化は、子供には負担であり、私は時に周囲との関係に不安を覚えたり、なかなか折り合いのつかない自分自身との関係に、疲れてしまったりしていたことを覚えています。そのような時、何冊かの本が身近にあったことが、どんなに自分を楽しませ、励まし、個々の問題を解かないまでも、自分を歩き続けさせてくれたか。私の限られた経験が、果たして何かのお役に立つものかと心配ですが、思い出すままにお話をしてみたいと

思います。

まだ小さな子供であった時に、一匹のでんでん虫の話を聞かせてもらったことがありました。不確かな記憶ですので、今、恐らくはそのお話の元はこれではないかと思われる、新美南吉の「でんでんむしのかなしみ」にそってお話いたします。そのでんでん虫は、ある日突然、自分の背中の殻に、悲しみが一杯つまっていることに気付き、友達を訪（たず）ね、もう生きていけないのではないか、と自分の背負っている不幸を話します。

友達のでんでん虫は、それはあなただけではない、私の背中の殻にも、悲しみは一杯つまっている、と答えます。小さなでんでん虫は、別の友達、又別の友達と訪ねて行き、同じことを話すのですが、どの友達からも返って来る答は同じでした。そして、でんでん虫はやっと、悲しみは誰でも持っているのだ、ということに気付きます。自分だけではないのだ。私は、私の悲しみをこらえていかなければならない。

この話は、このでんでん虫が、もうなげくのをやめたところで終っています。あの頃、私は幾つくらいだったのでしょう。母や、母の父である祖父、叔父や叔母たちが本を読んだりお話をしてくれたのは、私が小学校の2年くらいまででしたから、4歳から7歳くらいまでの間であったと思います。その頃、私はまだ大きな悲しみというものを知りませんでした。

最後になげくのをやめた、と知った時、簡単にああよかった、と思いました。それだけのことで、特にこのことにつき、じっと思いをめぐらせたということでもなかったのです。

しかし、この話は、その後何度となく、思いがけない時に私の記憶に甦って来ました。

殻一杯になる程の悲しみということと、ある日突然そのことに気付き、もう生きていけないと思ったでんでん虫の不安とが、私の記憶に刻みこまれていたのでしょう。少し大きくなると、はじめて聞いた時のように、「ああよかった」だけでは済まされなくなりました。

生きていくということは、楽なことではないのだという、何とはない不安を感じることもありました。それでも、私は、この話が決して嫌いではありませんでした。

私が小学校に入る頃に戦争が始まりました。昭和16年（1941年）のことです。四学年に進級する頃には戦況が悪くなり、生徒達はそれぞれに縁故を求め、又は学校集団として、田舎に疎開していきました。

私の家では父と兄が東京に残り、私は妹と弟と共に、母につれられて海辺に、山に、住居を移し、3度目の疎開先で終戦を迎えました。

度重なる移居と転校は子供には負担であり、異なる風土、習慣、方言の中での生活には、戸惑いを覚えることも少なくありませんでしたが、田舎での生活は、時に病気がちだった私をすっかり健康にし、私は蚕を飼ったり、草刈りをしたり、時にはゲンノショーコとカラマツ草を、それぞれ干して4キロずつ供出するという、宿題のノルマにも挑戦しました。8キロの干草は手では持ちきれず、母が背中に負わせてくれ、学校まで運びました。牛乳が手に入らなくなり、母は幼い弟のために山羊を飼い、その世話と乳しぼりを私にまかせてくれました。教科書以外にほとんど読む本のなかったこの時代に、たまに父が東京から持ってきてくれる本は、どんなに嬉しかったか。冊数が少ないので、惜しみ惜しみ読みました。

そのような中の1冊に、今、題を覚えていないのですが、子供のために書かれた日本の神話伝説の本がありました。日本の歴史の曙のようなこの時代を物語る神話や伝説は、どちらも8世紀に記された2冊の本、古事記と日本書紀に記されていますから、恐らくはそうした本から、子供向けに再話されたものだったのでしょう。

父がどのような気持ちからその本を選んだのか、寡黙な父から、その時も、その後もきいたことはありません。しかしこれは、今考えると、本当によい贈り物であったと思います。なぜなら、それから間もなく戦争が終わり、米軍の占領下に置かれた日本では、教育の方針が大巾に変わり、その後は歴史教育の中から、神話や伝説は全く削除されてしまったからです。

私は、自分が子供であったためか、民族の子供時代のようなこの太古の物語を、大変面白く読みました。今思うのですが、一国の神話や伝説は、正確な史実ではないかもしれませんが、不思議とその民族を象徴します。これに民話の世界を加えると、それぞれの国や地域の人々が、どのような自然観や生死観を持っていたか、何を尊び、何を恐れたか、どのような想像力を持っていたか等が、うっすらとですが感じられます。

父がくれた神話伝説の本は、私に、個々の家族以外にも、民族の共通の祖先がある事を教えたという意味で、私に一つの根っこのようなものを与えてくれました。

本というものは、時に子供に安定の根を与え、時にどこにでも飛んでいける翼を与えてくれるもののようです。

もっとも、この時の根っこは、かすかに自分の帰属を知ったという程のもので、それ以後、これが自己確立という大きな根に少しずつ育っていく上の、ほんの第一段階に過ぎないものではあったのですが。

また、これはずっと後になって認識したことなのですが、この本は、日本の物語の原型ともいうべきものを私に示してくれました。やがてはその広大な裾野に、児童文学が生まれる力強い原型です。そしてこの原型との子供時代の出会いは、その後私が異国を知ろうとする時に、何よりもまず、その国の物語を知りたいと思うきっかけを作ってくれました。

私にとり、フィンランドは第一にカレワラの国であり、アイルランドはオシーンやリヤの子供達の国、インドはラマヤナやジャータカの国、メキシコはポポル・ブフの国です。これだけがその国の全てでないことは勿論ですが、他国に親しみをもつ上で、これは大層楽しい入口ではないかと思っています。

2、30年程前から、「国際化」「地球化」という言葉をよくきくようになりました。しかしこうした事は、ごく初歩的な形で、もう何十年―もしかしたら100年以上も前から―子供の世界では本を通じ、ゆるやかに始まっていたといえないでしょうか。

1996年の「子供の本の日」のためにIBBYが作ったポスターには、世界の家々を象徴する沢山の屋根を見おろす上空に、ぽっかりと浮かんで、楽しげに本をよんでいる一人の少年が描かれていました。遠く離れた世界のあちこちの国で子供達はもう何年も何年も前から同じ物語を共有し、同じ物語の主人公に親しんで来たのです。

《次回143号に続く→》

《←前号142より》

父のくれた古代の物語の中で、一つ忘れられない話がありました。年代の確定出来ない、の世紀以前の一人の皇子の物語です。倭建御子（やまとたけるのみこ）と呼ばれるこの皇子は、父天皇の命を受け、遠隔の反乱の地に赴いては、これを平定して凱旋するのですが、あたかもその皇子の力を恐れているかのように、天皇は新たな任務を命じ、皇子に平穏な休息を与えません。悲しい心を抱き、皇子は結局はこれが最後となる遠征に出かけます。途中、海が荒れ、皇子の船は航路を閉ざされます。この時、付き添っていた后、弟橘比売命（おとたちばなひめのみこと）は、自分が海に入り海神のいかりを鎮めるので、皇子はその使命を遂行し覆奏してほしい、と云い入水し、皇子の船を目的地に向かわせます。この時弟橘は美しい別れの歌を歌います。

さねさし
相武（さがむ）の小野（をの）に
燃ゆる火の
火中（ほなか）に立ちて
問ひし君はも

このしばらく前、建（たける）と弟橘（おとたちばな）とは、広い枯れ野を通っていた時に、敵の謀（はかりごと）に会って草に火を放たれ、燃える火に追われて逃げまどい、九死に一生を得たのでした。弟橘の歌は、「あの時、燃えさかる火の中で、私の安否を気遣って下さった君よ」という、危急の折に皇子の示した、優しい庇護の気遣いに対する感謝の気持を歌ったものです。悲しい「いけにえ」の物語は、それまでも幾つかは知っていました。　しかし、この物語の犠牲は、少し違っていました。弟橘の言動には、何と表現したらよいか、建と任務を分かち合うような、どこか意志的なものが感じられ、弟橘の歌は―私は今、それが子供向けに現代語に直されていたのか、原文のまま解説が付されていたのか思い出す事が出来ないのですが―あまりにも美しいものに思われました。

「いけにえ」という酷（むご）い運命を、進んで自らに受け入れながら、恐らくはこれまでの人生で、最も愛と感謝に満たされた瞬間の思い出を歌っている事に、感銘という以上に、強い衝撃を受けました。はっきりとした言葉にならないまでも、愛と犠牲という二つのものが、私の中で最も近いものとして、むしろ一つのものとして感じられた、不思議な経験であったと思います。

この物語は、その美しさの故に私を深くひきつけましたが、同時に、説明のつかない不安感で威圧するものでもありました。古代ではない現代に、海を静めるためや、洪水を防ぐために、一人の人間の生命が求められるとは、まず考えられない事です。ですから、人身御供（ひとみごくう）というその事を、私が恐れる筈はありません。しかし、弟橘の物語には、何かもっと現代にも通じる象徴性があるように感じられ、その事が私を息苦しくさせていました。

今思うと、それは愛というものが、時として過酷な形をとるものなのかも知れないという、やはり先に述べた愛と犠牲の不可分性への、恐れであり、畏怖（いふ）であったように思います。

まだ、子供であったため、その頃は、全てをぼんやりと感じただけなのですが、こうしたよく分からない息苦しさが、物語の中の水に沈むというイメージと共に押し寄せて来て、しばらくの間、私はこの物語にずい分悩まされたのを覚えています。

疎開中に父が持って来てくれた本の中で、あと3冊、私の思い出に残っている本があります。これは兄の持っていた本で、いつか読みたいと思っていたものを、父に頼んで借りてきてもらったものでした。3冊共「日本少国民文庫」というシリーズに含まれていました。

「少国民文庫」は全部で15、6冊あり、「人間はどれだけの事をして来たか」「人類の進歩につくした人々」「発明物語 科学手工」「スポーツと冒険物語」などという題で1冊ごとがまとめられています。父はこの時、その中の「日本名作選」1冊と、「世界名作選」2冊を選んで持って来てくれました。

この文庫が始めて刊行されたのは昭和11年（1936年）、兄は五つで、私はまだ二つの頃です。その後戦争中の昭和17年（1942年）に改訂版が出されており、母が兄のために買ったのは、兄の年令から見てもこれであったと思います。今私の手許にあるものは、今から十数年前に入手した、昭和11年（1936年）版のうちの数冊ですが、「名作選」の内容は記憶のものとほぼ一致しますので、戦前も戦中も、あまり変化はなかったものと思われます。

今この3冊の本のうち、「世界名作選」二巻を開いてみると、キプリングのジャングル・ブックの中の「リッキ・ティキ・タヴィー物語」や、ワイルドの「幸福の王子」、カレル・チャペックの「郵便配達の話」、トルストイの「人は何によって生きるか」、シャルル・フィリップやチェーホフの手紙、アン・モロー・リンドバーグの「日本紀行」等が並んでいます。ケストナーやマーク・トウェイン、ロマン・ロラン、ヘンリー・ヴァンダイク、ラスキン等の名も見えます。必ずしも全部を熟読していない証拠に、内容の記憶がかすかなものもあります。

子供にも理解出来るような、いくつかの詩もありました。　カルル・ブッセ、フランシス・ジャム、ウイリアム・ブレーク、ロバート・フロスト…。

私が、印度の詩人タゴールの名を知ったのも、この本の中ででした。

「花の学校」という詩が選ばれていました。　後年、「新月」という詩集の中に、この詩を再び見出した時、どんなに嬉しかったことか。「花の学校」は、私をすぐに同じ詩人による「あかんぼの道」や「審く人」、「チャンパの花」へと導いていきました。ケストナーの「絶望」は、非常にかなしい詩でした。

小さな男の子が、汗ばんだ手に1マルクを握って、パンとベーコンを買いに小走りに走っています。ふと気づくと、手のなかのお金がありません。街のショー・ウィンドーの灯はだんだんと消え、方々の店の戸が締まり始めます。少年の両親は、一日の仕事の疲れの中で、子供の帰りを待っています。その子が家の前まで来て、壁に顔を向け、じっと立っているのを知らずに。心配になった母親が捜しに出て、子供を見つけます。一体どこにいたの、と尋ねられ、子供は激しく泣き出します。

「彼の苦しみは、母の愛より大きかった／二人はしょんぼりと家に入っていった」という言葉で終っています。

この世界名作選には、この「絶望」の他にも、ロシアのソログーブという作家の「身体検査」という悲しい物語が入っています。貧しい家の子供が、学校で盗みの疑いをかけられ、ポケットや靴下、服の中まで調べられている最中に、別の所から盗難品が出てきて疑いが晴れるという物語で、

この日帰宅した子供から一部始終をきいた母親が、

「何もいえないんだからね。大きくなったら、こんな事どころじゃない。この世にはいろんな事があるからね」と歎く言葉がつけ加えられています。思い出すと、戦争中にはとかく人々の志気を高めようと、勇ましい話が多かったように思うのですが、そうした中でこの文庫の編集者が、「絶望」やこの「身体検査」のような話を、何故ここに選んで載せたのか興味深いことです。生きている限り、避けることの出来ない多くの悲しみに対し、ある時期から子供に備えさせなければいけない、という思いがあったのでしょうか。そしてお話の中のでんでん虫のように、悲しみは誰もが皆負っているのだということを、子供達に知ってほしいという思いがあったのでしょうか。

私は、この文庫の編集企画をした山本有三につき、2、3の小説や戯曲による以外詳しくは知らないのですが、「日本名作選」及び「世界名作選」を編集するに当たっては、子供に喜びも悲しみも、深くこれを味わってほしいという、有三と、その協力者達の強い願いがあったのではないかと感じられてなりません。本から得た「喜び」についても、ここで是非お話をさせて頂きたいと思います。たしかに、世の中にさまざまな悲しみのあることを知ることは、時に私の心を重くし、暗く沈ませました。しかし子供は不思議なバランスのとり方をするもので、こうして少しずつ、本の中で世の中の悲しみにふれていったと同じ頃、私は同じく本の中に、大きな喜びも見出していっていたのです。　この喜びは、心がいきいきと躍動し、生きていることへの感謝が湧き上がって来るような、快い感覚とでも表現したらよいでしょうか。初めてこの意識を持ったのは、東京から来た父のカバンに入っていた小型の本の中に、一首の歌を見つけた時でした。それは春の到来を告げる美しい歌で、日本の五七五七七の定型で書かれていました。その一首をくり返し心の中で誦していると、古来から日本人が愛し、定型としたリズムの快さの中で、言葉がキラキラと光って喜んでいるように思われました。

詩が人の心に与える喜びと高揚を、私はこの時始めて知ったのです。

先に私は、本から与えられた「根っこ」のことをお話いたしましたが、今ここで述べた「喜び」は、これから先に触れる「想像力」と共に、私には自分の心を高みに飛ばす、強い「翼」のように感じられました。「世界名作選」の編集者は、悲しく心の沈む「絶望」の詩と共に、こうした心の踊る喜びの歌を、その選に入れるのを忘れてはいませんでした。ロバート・フロストの「牧場」という詩は、私にそうした喜びを与えてくれた詩の一つでした。短い詩なので読んでみます。

「牧　場（まきば）」

牧場（まきば）の泉（いづみ）を掃除（さうぢ）しに行（い）ってくるよ。
ちょっと落葉（おちば）をかきのけるだけだ。
（でも水が澄（す）むまで見てるかも知れない）
すぐ帰（かへ）ってくるんだから一　君も来（き）たまへ
小牛（こうし）をつかまへに行ってくるよ。
母牛（おや）のそばに立ってるんだがまだ赤（あか）ん坊（ぼう）で
母牛（おや）が舌（した）でなめるとよろけるんだよ。
すぐ帰（かへ）ってくるんだから一　君も来たまへ

この詩のどこに、喜びの源があるのか、私に十分説明することは出来ません。勿論その詩の内容が、とても感じのよいものなのですが、この詩の用語の中にも、幾つかの秘密が隠れているようです。どれも快い想像をおこさせる「牧場」、「泉」、「落葉」、「水が澄む」等の言葉、そして「すぐ帰ってくるんだから―君も来たまえ」という、一節ごとのくり返し。この詩を読んでから7、8年後、私はこの詩に、大学の図書館でもう一度巡り会うことになります。

米詩の詩歌集（アンソロジー）の中にでもあったのでしょうか。この度は原語の英語によるものでした。この詩を、どこかで読んだことがある、と思った時、二つの節の最終行のくり返（かえ）しが、記憶の中の日本語の詩と、ぴったりと重なったのです。

「すぐ帰ってくるんだから―君も来たまえ。」

この時始めて名前を知ったバーモントの詩人が、頁の中から呼びかけてきているようでした。英語で読むと、更に掃除（クリーン）、落葉（リーヴス）、澄（クリアー）む、なめる（リック）、小牛（リトルカーフ）等、L音の重なりが快く思われました。しかし、こうしたことはともかくとして、この原文を読んで私が心から感服したのは、私がかつて読んだ阿部知二の日本語訳の見事さ、美しさでした。

この世界名作選を編集する時、作品を選ぶ苦心と共に、日本語の訳の苦心があった、と山本有三はその序文に記しています。

既刊の翻訳に全て目を通し、カルル・ブッセの「山のあなた」の詩をのぞく、全ての作品は、悉く新たな訳者に依頼して新訳を得、又、同じ訳者の場合にも、更に良い訳を得るために加筆を求めたといいます。

私がこの本を読んだ頃、日本は既に英語を敵国語とし、その教育を禁止していました。戦場におもむく学徒の携帯する本にも、さまざまな制約があったと後に聞きました。子供の私自身、英米は敵だとはっきりと思っておりました。フロストやブレイクの詩も、もしこうした国の詩人の詩だと意識していたら、何らかの偏見を持って読んでいたかも知れません。

世界情勢の不安定であった1930年代、40年代に、子供達のために、広く世界の文学を読ませたいと願った編集者があったことは、当時これらの本を手にすることの出来た日本の子供達にとり、幸いなことでした。

この本を作った人々は、子供達が、まず美しいものにふれ、又、人間の悲しみ喜びに深く触れつつ、さまざまに物を思って過ごしてほしいと願ってくれたのでしょう。因（ちな）みにこの名作選の最初の数頁には、日本や世界の絵画、彫刻の写真が、黒白ではありますが載っていました。当時私はまだ幼く、こうした編集者の願いを、どれだけ十分に受けとめていたかは分かりません。

しかし、少なくとも、国が戦っていたあの暗い日々のさ中に、これらの本は国境による区別なく、人々の生きる姿そのものを私にかいま見させ、自分とは異なる環境下にある人々に対する想像を引き起こしてくれました。数冊の本と、本を私に手渡してくれた父の愛情のおかげで、私も又、世界の屋根の上にぽっかりと浮き、楽しく本

を読むあのIBBYのポスターの少年の分身でいられたのです。

戦争は1945年の8月に終わりました。私達家族は、その後しばらく田舎にとどまり、戦災をまぬがれた東京の家にもどりました。もう小学校の最終学年になっていました。この辺で、これまでここでとり上げてきた本の殆どが、疎開生活という、やや特殊な環境下で、私の読んだ本であったということにつき、少しふれたいと思います。この時期、私は本当に僅かしか本を持ちませんでした。それは、数少ない本――それも、大人の手を通って来た、ある意味ではかなり教育的な本――を、普段よりもずっと集中して読んでいた、一つの特殊な期間でした。

疎開生活に入る以前、私の生活に読書がもった比重は、それ程大きなものではありません。自分の本はあまり持たず、三つ年上の兄のかなり充実した本棚に行っては、気楽で面白そうな本を選び出してきて読んでいました。私の読書力は、主に少年むきに書かれた剣豪ものや探偵小説、日本で当時ユーモア小説といわれていた、実に楽しく愉快な本の読書により得られたものです。漫画は今と違い、種類が少なかったのですが、新しいものが出ると、待ちかねて読みました。

今回とり上げた「少国民文庫」にも、武井武雄という人の描いた、赤ノッポ青ノッポという、二匹の鬼を主人公とする漫画がどの巻にも入っており、私はくり返しくり返しこれらを楽しみ、かなり乱暴な「鬼語」に熟達しました。

子供はまず、「読みたい」という気持から読書を始めます。ロッテンマイアーさんの指導下で少しも字を覚えなかったハイジが、クララのおばあ様から頂いた一冊の本を読みたさに、そしてそこに、ペーターの盲目のおばあ様のために本を読んであげたい、というもう一つの動機が加わって、どんどん本が読めるようになったように。幼少時に活字に親しむことが、何より大切だと思います。

ある程度の読書量に耐える力がついていなかったら、そして、急に身のまわりから消えてしまった本や活字への郷愁がなかったら、私は父が持って来てくれた数冊の本を、あれ程熱心に読むことはなかったし、一年半余におよぶ私の疎開生活に、読書の思い出をつけ加えることは出来ませんでした。

今振り返って、私にとり、子供時代の読書とは何だったのでしょう。

何よりも、それは私に楽しみを与えてくれました。そして、その後に来る、青年期の読書のための基礎を作ってくれました。それはある時には私に根っこを与え、ある時には翼をくれました。この根っこと翼は、私が外に、内に、橋をかけ、自分の世界を少しずつ広げて育っていくときに、大きな助けとなってくれました。読書は私に、悲しみや喜びにつき、思い巡らす機会を与えてくれました。本の中には、さまざまな悲しみが描かれており、私が、自分以外の人がどれほどに深くものを感じ、どれだけ多く傷ついているかを気づかされたのは、本を読むことによってでした。

自分とは比較にならぬ多くの苦しみ、悲しみを経ている子供達の存在を思いますと、私は、自分の恵まれ、保護されていた子供時代に、なお悲しみはあったということを控えるべきかもしれません。しかしどのような生にも悲しみはあり、一人一人の子供の涙には、それなりの重さがあります。私が、自分の小さな悲しみの中で、本の中に喜びを見出せたことは恩恵でした。

本の中で人生の悲しみを知ることは、自分の人生に幾ばくかの厚みを加え、他者への思いを深めますが、本の中で、過去現在の作家の創作の源となった喜びに触れることは、読む者に生きる喜びを与え、失意の時に生きようとする希望を取り戻させ、再び飛翔する翼をととのえさせます。悲しみの多いこの世を子供が生き続けるためには、悲しみに耐える心が養われると共に、喜びを敏感に感じとる心、又、喜びに向かって伸びようとする心が養われることが大切だと思います。

そして最後にもう一つ、本への感謝をこめてつけ加えます。

読書は、人生の全てが、決して単純でないことを教えてくれました。私たちは、複雑さに耐えて生きていかなければならないということ。人と人との関係においても。国と国との関係においても。

今回お招きを頂きながら、ニューデリー会議に直接参加出来なかったことは、本当に残念なことでした。この大会を組織なさったジャファ夫人始めAWIC（Association of Writers and Illustrators for Children）の方達、IBBY会長のカルメン・デアルデン夫人、事務総長のリーナ・マイセン夫人、そして、その方達を支えたIBBYの各支部の方達にとり、この大会の開催までの道は、決してなだらかなものではなかったでしょう。

皆様方は、さまざまな複雑な問題のある中で、沈着に、忍耐強く、この日を準備してこられました。その国が例えどのような政治状態にあろうとも、そこに子供達がいる限り、IBBYには果たすべき役割のあることを思い、このような形になりましたが、私はこのニューデリー大会1998年に参加いたしました。

どうかこれからも、これまでと同じく、本が子供の大切な友となり、助けとなることを信じ、子供達と本とを結ぶIBBYの大切な仕事をお続け下さい。子供達が、自分の中に、しっかりとした根を持つた子供達が、喜びと想像の強い翼を持つために子供達が、痛みを伴う愛を知るために、そして、子供達が人生の複雑さに耐え、それぞれに与えられた人生を受け入れて、やがて一人一人、私共全てのふるさとであるこの地球で、平和の道具となっていくために。

「婚活神社」十傑

東京　白井裕一

週刊新潮3月28日・21日号より
詳細は、週刊新潮誌をご購読下さい。

10位・代々木八幡宮（東京都）
9位・鶴岡八幡宮（神奈川県）
8位・神宮（伊勢の神宮）（三重県）
7位・川越氷川神社（埼玉県）
6位・安井金毘羅宮（京都府）
5位・出雲大社（島根県）
4位・八重垣神社（島根県）
3位・今戸神社（東京都）
2位・東京大神宮（東京都）
1位・九頭龍神社（神奈川県）

靖国神社や各県の護国神社も是非参拝して下さいｗｗ

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

こういう下世話の話は、靖国神社はいまひとつ頼りになりません。

数年間、土屋議員らの裁判に靖国神社八代宮司湯澤様が必ず傍聴にこられていました。ところが傍聴はくじ引き。宮司はいつもはずれなんです。さて、各県の護国神社のご利益は？・・・マスキ

を読むあのIBBYのポスターの少年の分身でいられたのです。

戦争は1945年の8月に終わりました。私達家族は、その後しばらく田舎にとどまり、戦災をまぬがれた東京の家にもどりました。もう小学校の最終学年になっていました。この辺で、これまでここでとり上げてきた本の殆どが、疎開生活という、やや特殊な環境下で、私の読んだ本であったということにつき、少しふれたいと思います。この時期、私は本当に僅かしか本を持ちませんでした。それは、数少ない本――それも、大人の手を通って来た、ある意味ではかなり教育的な本――を、普段よりもずっと集中して読んでいた、一つの特殊な期間でした。

疎開生活に入る以前、私の生活に読書がもった比重は、それ程大きなものではありません。自分の本はあまり持たず、三つ年上の兄のかなり充実した本棚に行っては、気楽で面白そうな本を選び出してきて読んでいました。私の読書力は、主に少年むきに書かれた剣豪ものや探偵小説、日本で当時ユーモア小説といわれていた、実に楽しく愉快な本の読書により得られたものです。漫画は今と違い、種類が少なかったのですが、新しいものが出ると、待ちかねて読みました。

今回とり上げた「少国民文庫」にも、武井武雄という人の描いた、赤ノッポ青ノッポという、二匹の鬼を主人公とする漫画がどの巻にも入っており、私はくり返しくり返しこれらを楽しみ、かなり乱暴な「鬼語」に熟達しました。

子供はまず、「読みたい」という気持から読書を始めます。ロッテンマイアーさんの指導下で少しも字を覚えなかったハイジが、クララのおばあ様から頂いた一冊の本を読みたさに、そしてそこに、ペーターの盲目のおばあ様のために本を読んであげたい、というもう一つの動機が加わって、どんどん本が読めるようになったように。幼少時に活字に親しむことが、何より大切だと思います。

ある程度の読書量に耐える力がついていなかったら、そして、急に身のまわりから消えてしまった本や活字への郷愁がなかったら、私は父が持って来てくれた数冊の本を、あれ程熱心に読むことはなかったし、一年半余におよぶ私の疎開生活に、読書の思い出をつけ加えることは出来ませんでした。

今振り返って、私にとり、子供時代の読書とは何だったのでしょう。

何よりも、それは私に楽しみを与えてくれました。そして、その後に来る、青年期の読書のための基礎を作ってくれました。それはある時には私に根っこを与え、ある時には翼をくれました。この根っこと翼は、私が外に、内に、橋をかけ、自分の世界を少しずつ広げて育っていくときに、大きな助けとなってくれました。読書は私に、悲しみや喜びにつき思い巡らす機会を与えてくれました。本の中には、さまざまな悲しみが描かれており、私が、自分以外の人がどれほどに深くものを感じ、どれだけ多く傷ついているかを気づかされたのは、本を読むことによってでした。

自分とは比較にならぬ多くの苦しみ、悲しみを経ている子供達の存在を思いますと、私は、自分の恵まれ、保護されていた子供時代に、なお悲しみはあったということを控えるべきかもしれません。しかしどのような生にも悲しみはあり、一人一人の子供の涙には、それなりの重さがあります。私が、自分の小さな悲しみの中で、本の中に喜びを見出せたことは恩恵でした。

本の中で人生の悲しみを知ることは、自分の人生に幾ばくかの厚みを加え、他者への思いを深めますが、本の中で、過去現在の作家の創作の源となった喜びに触れることは、読む者に生きる喜びを与え、失意の時に生きようとする希望を取り戻させ、再び飛翔する翼をととのえさせます。悲しみの多いこの世を子供が生き続けるためには、悲しみに耐える心が養われると共に、喜びを敏感に感じとる心、又、喜びに向かって伸びようとする心が養われることが大切だと思います。

そして最後にもう一つ、本への感謝をこめてつけ加えます。

読書は、人生の全てが、決して単純でないことを教えてくれました。私たちは、複雑さに耐えて生きていかなければならないということ。人と人との関係においても。国と国との関係においても。

今回お招きを頂きながら、ニューデリー会議に直接参加出来なかったことは、本当に残念なことでした。この大会を組織なさったジャファ夫人始めAWIC（Association of Writers and Illustrators for Children）の方達、IBBY会長のカルメン・デアルデン夫人、事務総長のリーナ・マイセン夫人、そして、その方達を支えたIBBYの各支部の方達にとり、この大会の開催までの道は、決してなだらかなものではなかったでしょう。

皆様方は、さまざまな複雑な問題のある中で、沈着に、忍耐強く、この日を準備してこられました。その国が例えどのような政治状態にあろうとも、そこに子供達がいる限り、IBBYには果たすべき役割のあることを思い、このような形になりましたが、私はこのニューデリー大会1998年に参加いたしました。

どうかこれからも、これまでと同じく、本が子供の大切な友となり、助けとなることを信じ、子供達と本とを結ぶIBBYの大切な仕事をお続け下さい。子供達が、自分の中に、しっかりとした根を持つた子供達が、喜びと想像の強い翼を持つために子供達が、痛みを伴う愛を知るために、そして、子供達が人生の複雑さに耐え、それぞれに与えられた人生を受け入れて、やがて一人一人、私共全てのふるさとであるこの地球で、平和の道具となっていくために。

「婚活神社」十傑

東京　白井裕一

週刊新潮3月28日・21日号より詳細は、週刊新潮誌をご購読下さい。

10位・代々木八幡宮（東京都）
9位・鶴岡八幡宮（神奈川県）
8位・神宮（伊勢の神宮）（三重県）
7位・川越氷川神社（埼玉県）
6位・安井金毘羅宮（京都府）
5位・出雲大社（島根県）
4位・八重垣神社（島根県）
3位・今戸神社（東京都）
2位・東京大神宮（東京都）
1位・九頭龍神社（神奈川県）

靖国神社や各県の護国神社も是非参拝して下さいｗｗ

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

こういう下世話の話は、靖国神社はいまひとつ頼りになりません。

数年間、土屋議員らの裁判に靖国神社八代宮司湯澤様が必ず傍聴にこられていました。ところが傍聴はくじ引き。宮司はいつもはずれなんです。さて、各県の護国神社のご利益は？・・・マスキ

防大五十七期生卒業式安倍首相訓示

防衛大学の卒業式で訓示する安倍首相
＝17日午前、神奈川県横須賀市（共同）

本日、伝統ある防衛大学校の卒業式にあたり、これからのわが国の防衛を担うことになる諸君に、心からお祝いを申し上げます。卒業、おめでとう。諸君の規律正しく、りりしい雄姿に接し、自衛隊の最高指揮官として、心強く、頼もしく思います。

また、学生の教育に尽力されてこられた、国分良成大学校長をはじめとする教職員の方々に敬意を表します。日ごろから防衛大学校にご理解とご協力をいただいているご来賓、ご家族の皆様には、心より感謝申し上げます。

本日は卒業生諸君が、ここ防衛大学校から巣立ち、新たな任務に就く良い機会ですので、内閣総理大臣、そして、自衛隊の最高指揮官として、一言申し上げさせていただきます。

４年前の１月１５日、ニューヨークを飛び立った旅客機が、離陸直後のエンジン停止という最悪の事態に直面し、ハドソン川に緊急着水しました。当時、「ハドソン川の奇跡」とも呼ばれたこのニュースを覚えている人も多いと思います。

最後まで機内に残り、乗客・乗員１５５人全員の命を守りきったサレンバーガー機長は、高まる称賛の声に対して、このように語ったそうです。

「私たちは日ごろの訓練通りに行動しただけだ」 そこには功名心はありません。あるのは、ただ、乗客・乗員を断固として守りぬくという、機長としての使命感と責任感です。かつて空軍のパイロットでもあったサレンバーガー機長は、こうも語っています。

「すべての人生は、このときに備えるためにあったように思う」

「ハドソン川の奇跡」は、「偶然」の結果ではありません。サレンバーガー機長の強い使命感と責任感に裏打ちされた、努力と訓練の積み重ねがもたらした「必然」の結果であったと思います。

一生に一度あるかないかの「そのとき」に、完璧に任務を全うする。これは並大抵のことではありません。しかし、これから幹部自衛官となる諸君には、その心構えを常に持って、鍛錬を積み重ねてほしいと思います。

何よりも、「そのとき」が訪れないようにすることが、日本にとって最善であることは言うまでもありません。しかし、万が一の「そのとき」には、国民の生命と財産、わが国の領土、領海、領空を断固として守りぬく。その責任感を胸に刻み、諸君には、いかなる厳しい訓練や任務にも、耐えていってもらいたいと思います。日本を取り巻く安全保障環境は厳しさを増しています。諸君が防衛大学校の門をたたいた４年前とは異なり、わが国の領土、領海、領空に対する挑発が続いています。諸君が、これから臨む現場で起きていることは、冷厳な「現実」であり、「今、そこにある危機」であります。

今、この瞬間も、諸君の先輩方は、荒波を恐れず、乱気流を乗り越え、泥にまみれながらも、極度の緊張感に耐え、強い誇りを持って、任務を立派に果たしています。

私はその先頭に立って、国民の生命、財産、わが国の領土、領海、領空を守りぬく決意であります。１１年ぶりに防衛関係費を増加します。今後、防衛大綱を見直し、南西地域を含め、自衛隊の対応能力の向上を進めます。

先般のオバマ大統領との会談により、緊密な日米同盟も完全に復活しました。そのうえで、日米安保体制のもとでの抑止力を高めるためにも、わが国は諸君とともに、さらなる役割を果たしていかねばなりません。私と日本国民は、常に諸君とともにあります。その自信と誇りを胸に、諸君には、それぞれの現場で活躍してもらいたいと思います。

この場には、カンボジア、インドネシア、モンゴル、大韓民国、タイ、そしてベトナムからの留学生諸君もいます。諸君は、国の守りを担う、それぞれの母国の宝であることは間違いありません。

同時に、わが国にとっても諸君の母国とわが国をつなぐ、大切な友情の架け橋であります。ぜひとも、ここでの学びの日々で育まれた深い絆を、今後とも発展させてほしいと思います。そして、愛する母国に戻り、それぞれの現場で大いに活躍されることを、心より祈念します。

今日、この場所から、それぞれの現場に踏み出す諸君に、最後に、この言葉を贈りたいと思います。

「批評するだけの人に価値はありません。真に称賛しなければならないのは、泥と汗と血で顔を汚し、実際に現場に立つ者です。勇敢に努力する者であり、努力の結果としての過ちや、至らなさをも持ち合わせた者です」

米西戦争において自ら募った義勇兵を率いて、祖国のため戦場に飛び込んでいった経験もあるセオドア・ルーズベルト元米国大統領は、こう語りました。

卒業生諸君。諸君には、それぞれの現場で、自信と誇りを持って、全力を尽くしてほしいと願います。諸君は、国民と国家を守るという、崇高な現場での任務に、ひたすら没頭してください。

ご家族の皆さん、大切なお子さまを、現場に送り出してくださることに、最高指揮官として感謝の念で一杯です。お預かりする以上、しっかりと任務が遂行できるよう万全を期し、皆さんが誇れるような自衛官に育てあげることをお約束いたします。

最後となりましたが、日ごろから防衛大学校にご理解とご支援をいただいているご来賓の方々に感謝申し上げるとともに、本日、栄えある門出に際し、諸君に幸多からんことを祈念し私の訓示といたします。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

安倍さんにお礼を申し上げたい。我々国民の声を正確に代弁していただいたことを。

マスキ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

愛国女性のつどい・花時計の街宣

3月26日12時〜　渋谷ハチ公前

政権交代直後から安倍首相を叩くマスコミの偏向報道は目に余るものがあります。政策に対する批判ならともかく、根拠なく公人である首相の個人攻撃をする下品さ、陰湿さは信じられません。４月１日のエイプリルフールに便乗して安倍さんを貶める報道をするらしい、とか４月４日からＮＨＫが一斉に安倍さん攻撃を始めるらしい、という情報が流れています。

情報の真偽は別として、この機会にマスコミの情報は嘘だらけだということを多くの国民に伝えるべきだと思います。マスコミの危険性に国民が気づくことが日本再生への第一歩です。そこで花時計はマスコミの偏向報道周知街宣を行いました。

米国の戦争犯罪に時効はない

主権回復を目指す会　西村修平

東京大空襲６８周年

http://nipponism.net/wordpress/?p=21021

《真の追悼とは犠牲者の無念を晴らすことだ

米国による全土空襲は シナの「三光作戦」だった》

朝日新聞（３月８日）の夕刊に、ギタリストの寺内タケシ氏が連載記事で６８年前の記憶、３月１０日の東京大空襲を語っている。

３月１０日、当時６才の寺内氏は叔父さんの家に遊びに来ていて東京大空襲にあった。池に逃れて助かり、上野駅まで辿り着き、常磐線で実家の土浦まで向かうが、途中、米国の戦闘機の機銃掃射で多くの人が死んだ光景を語っている。

空襲の余塵くすぶるなか、米国は一晩の１０万人虐殺では飽きたらず、昼日中まで、戦闘機でもって容赦ない殺戮を東京近辺で繰り広げていた。米国のこうした無差別空襲は、日本のいたる都市で展開されたのである。シナの伝統的軍事作戦に、「焼き尽くす、殺し尽くす、奪い尽くす」という三光作戦がある。これはシナの専売特許ではない。米国による酸鼻を極めた無差別空襲が史上最大の三光作戦だ。

幾年の月日が過ぎても、我々日本民族は米国による無差別空襲の戦争犯罪を忘れない。同時に、為す術なく焼き殺されていった同胞の無念に思いを馳せる。３月１０日、東京大空襲の慰霊とは同胞の無念を晴らすことであり、これをなくして真の慰霊などあり得ない。

今年の３月１０日は例年とはうって変わって、多くの民族派が大使館前に集まり、米国の戦争犯罪を糾弾した。夕刻には統一戦線義勇軍などが呼び掛けた抗議デモもあり、ライトに浮かんだ米国大使館へ怒りの声が浴びせられた。

抗議文

「東京大空襲６８周年　米国の戦争犯罪に時効はない」

《米国はシナ・朝鮮と結託した慰安婦強制連行の反日・捏造を止めろ》

駐日米国大使　ジョン・Ｖ・ルース　殿

【米国の傲慢を日本国民は許さない】

６８年前の今日、昭和２０年３月１０日、東京大空襲が行われた。予め第一波の爆撃で四方を火の壁にして逃げ道を封鎖し、その真上を第二波、第三波が襲った。執拗に絨毯爆撃を反復し、逃れる術（すべ）を持たない非戦闘員の日本国民を皆殺しにした。一晩で１０万人を死に至らしめ、家屋２７万８千戸を消失させた悪魔の所業は米国の戦争犯罪として人類の歴史に刻印され、永久に消え去ることは無い。

さらに米国は、我が国の組織的な軍事行動が既に壊滅した状況下であったにもかかわらず、広島と長崎に原子爆弾を投下し、３０万人にも及ぶ無辜の日本国民を無差別殺戮した。これらの許されざる戦争犯罪について、米国は未だ我が国に対して一言の謝罪すらしていない。それどころか、戦争を早期に終結させるためには当然の手段であったと詭弁を弄し、居直り続けている。

国家間の戦闘行為と全く次元の異なる殺戮行為に、謝罪をあくまで拒み、自らの戦争犯罪を認めない米国の傲慢を日本国民は許すわけにはいかない。米国民と米国オバマ大統領は３月１０日、日本国民に対して無差別殺戮の戦争犯罪を謝罪せよ！

【米国は慰安婦強制連行の歴史捏造を止めよ！】

米下院外交委員会は０７年６月２６日、日本軍による慰安婦強制連行に関する決議案を大差で可決した。慰安婦問題はシナと朝鮮がでっち上げた歴史偽造で、日本を陥れるための彼らの精神侵略である。これは、我が国皇軍兵士が女性を強制連行した挙げ句、性奴隷として使役したという史上最大の陰謀である。

さらに１０年１０月２３、韓国系米国人が米国ニュージャージー州に建てた慰安婦記念碑を、山谷えり子氏ら国会議員らの抗議を無視して放置している。

【日本女性を性奴隷にした米国の犯罪】

米国は朝鮮人と結託した歴史偽造を演ずる前に、米国が我が国を不法占領していた時期、日本人女性に加えた性暴力の数々に国家として謝罪しなければならない。

《１１頁４段目へ続く↓》

日教組が半分肩代わりしたらどうだ

M情報　増木重夫

とりあえず、次の新聞を読んでください。

大阪のマンションで2児放置死の母、懲役30年確定へ　産経新聞　3月27日

大阪市西区の自宅マンションで平成22年、3歳の長女と1歳の長男を放置し餓死させたとして、殺人罪に問われた母親の無職、中村（旧姓下村）早苗被告（25）について、最高裁第2小法廷は、被告側の上告を棄却する決定をした。決定は25日付。中村被告を懲役30年とした1、2審判決が確定する。

子供2人を自宅に放置して外出した育児放棄に殺意があったかが争点だった。

1審大阪地裁の裁判員裁判判決は、中村被告が最後に家を出た際、衰弱している2人の姿を目の当たりにしていたのに、部屋を施錠したことなどから「立ち去れば死亡させる危険性が高いと認識していた」と未必の殺意を認定。殺人罪が成立すると判断し、保護責任者遺棄致死罪とした弁護側の主張を退けた。

その上で、「2人は母親を待ち続け、空腹にさいなまれながら命を絶たれた。刑事責任は極めて重い」として、無期懲役の求刑に対して有期刑の上限となる懲役30年を言い渡した。

2審大阪高裁も「子供が死に至ることを認識していたというべきだ」と判断、1審を支持していた。

1、2審判決によると、中村被告は22年6月9日、長女の桜子ちゃん（3）と長男の楓ちゃん（1）に食事を与えなければ死亡する可能性が高いと知りながら、自室に閉じ込めて外出。帰宅せずに放置し、同月下旬に餓死させた。

この判決に接し、涙目になり、教育の重要性を今あらためて認識しています。

早苗被告の殺意の有無は裁判で争そっていただいて、そんなことより、この事件の真因を考えないと、この種の事件は今後も続くと思います。そして防衛できない乳幼児がまた被害者になるのです。

戦後70年。特にここ3～40年、戦後の教育界を支配したのは日教組です。「自分らしく生きる」とか「個性を大事に」とか、「私には私の人生がある」等、自分の権利ばっかりを教えてきました。言うまでもなく、権利と義務・責任は対のもの。ところがこの義務・責任に関しては全く教えてない。そしてそれがおかしな表現ですが世襲される。無責任の連鎖です。「自分らしく生きる」権利がある前に、「子供を看護する責任」が優先することを。「ガマンすること。」「だめなものはダメ」を習ってない。「だから被告に責任はない。」とは言いませんが、攻められるのは被告だけではないと思います。

権利しか教えない日教組。社会が悪い社会が悪いという左組にそのまま言葉を返したい。その「悪い」社会を作ったのは日教組ではないか。被告の彼女もまた、ある意味日教組の犠牲者だと思います。

日教組は少しは反省し彼女の懲役の半分くらいは背負ったら如何でしょうか。

話は飛びますが、面白い話があります。先日福井の旧友に電話をしました。

小・中学時代の同級生で家が近所でタカちゃんと呼んでいました。40年ぶりです。彼は今、福井市教育長。話の内容は先日報道された生徒の体力測定で、福井1位、大阪1位（ただしビリから）。福井を研究しようと言うわけです。あわよくば大阪へ来てもらって講演をしてもらおうという下心の電話です。

家族の安否から、いろいろ40年分の四方山話です。その中で彼は、「国旗を揚げるとか揚げないとか、国歌を歌うとか歌わないとか都会で騒いで欲しくない。」といいました。「騒がれると、揚げなくていい、歌わなくていいと勘違いする生徒が出てくるから。こっちの生徒は皆、そういうもんだと思ってる。」と言うのです。

大阪は橋下市長が先頭に立ち、害虫（組合）駆除に必死。ところが福井は味をよくするために皆がんばっている。やってることが違うと感じました。彼は福井1位、大阪1位（ビリから）の原因は社会環境の違いが大きい。と言うのです。全くその通りだと思います。

大阪で、祖父母同居は2割くらいでしょうか。福井では7～8割くらいでしょう。前述の早苗被告とおじいちゃんおばあちゃん同居なら、このような事件は絶対起こっていません。

福井は日教組組織率95％位。校長、教頭も入っています。ところが何をやっているのか教育長は知らないと言う。と言うことは「団交」や「要求」、まして選挙活動などないわけです。福井の日教組は生活互助会と言うことは知っていましたがおおらかなものです。

組合の動き如何で教育が成功もし崩壊もするわけです。本当に大阪の日教組は『癌』です。

《↓　10頁末尾より》

厚木基地に降りた米国占領軍の先遣隊が、最初にした任務は米兵専用の「慰安所施設」の設置であった。米兵の婦女暴行を防ぐとして、占領軍の指令で日本政府は昭和20年8月18日、「外国軍駐屯地における慰安所施設の設置に関する内務省警保局長通牒」を発して、米兵相手の慰安所施設を各地に急設した。そして、そこに日本人女性約8万人が集められ性的使役に供せられた。

米兵はそれにも飽きたらず、婦女暴行を全国各地で働き、その犯罪はおびただしいこと限りがなかったが、その米国がわが国に対して、慰安婦強制連行の捏造を煽るなど、盗っ人猛々しいにも程がある。米国よ、恥を知れ！

【歴史捏造を煽る米国との軍事同盟は成立しない】

米国はシナや朝鮮と結託して「南京大虐殺」や「慰安婦強制連行」といった、いわゆる「歴史問題」を捏造させて、プロパガンダとして利用していることは明々白々である。我が国は現在、シナによる尖閣諸島侵略の脅威に直面しているが、米国はこれらの島々を日本国民に代わって、自国青年らの血など流してまで守るはずがない。

米国が犯した戦争犯罪への追及を断じて緩めず、併せて、シナ、朝鮮と結託した慰安婦強制連行という精神侵略と我々は戦い抜く。日本国家にとって何らの有効性を持たない日米安保を大幅に見直し、自主独立を目指すことを宣言する。

平成25年3月10日

主権回復を目指す会代表

東京大空襲68周年抗議集会一同

拉致事件の真因は憲法9条

救う会大阪阪神チーム　増木重夫

H25-3-24ＪＲ・阪急宝塚駅頭で街頭署名

ちょっと今日は、拉致事件が起きた原因を違う角度から見てみましょう。

今から思うとこれが間違いの始まりでしたが、有本さんは最初土井たか子衆議院議員、オタカさんに「娘が拉致された」と相談に行きました。そして、逆に「騒ぐな！」と脅されて帰ってきました。

常識的に考えて欲しいのですが、泥棒に入る際、庭にドーベルマンを飼っている家と、かわいいぬいぐるみを置いてある家と、どちらに入りますか。１９７８年。北朝鮮はレバノンの女性を拉致しました。直ちにレバノン政府は北朝鮮に強硬に抗議し、国交断絶を宣言。女性返還に応じなければ武力による攻撃やもすると更に圧力をかけました。これに対し北朝鮮全員を解放し、女性達は無事にレバノンに帰還することができた。ところが日本は、ここで一番重要な「武力」を背景にした交渉ができないのです。憲法９条があるから。ドーベルマンではなく、ぬいぐるみなのです。

社会党系は「９条の会」なるものを作って、「護憲派」と称し、憲法改正に大反対しています。しかし、憲法を改正し、武力を持たない限り、拉致された８百人とも言える日本人は誰一人帰ってこないでしょう。この土井党首（当時）の愛弟子が中川智子（宝塚市長）であり、辻元清美であり、福島瑞穂な分けです。だから、彼女らへの抗議を込めて、救う会大阪では「阪神チーム」を結成し宝塚市で街頭署名を始めました。これからも毎月１回、続けていこうと思います。

幸い、政権は安倍さん。自民党、日本維新の会、国民の生活等は憲法改正を主張しています。何とかこの機に。そして拉致解決を。

活動資金ご協力のお願い

先ずは、平素より私どもの活動に力強いご支援を賜り心から御礼申し上げます。このレポートにもありますように、私どもは子供達に誇りある国を残すため、日々命がけで戦っています。ところが問題は活動資金。今まで以上にがんばります。何卒資金のご協力を伏してお願い申し上げます。

※　この、M情報機関紙は新聞の形態をとっていますが、「活動の報告書」です。特に「購読料」は設定していません。カンパをよろしくお願いいたします。

○　カンパ金の主な使途は下記団体の、
・活動の資料等の発送費・道路、公園使用申請料等・交通費、通信費資料、ビラ等の制作費・備品購入費

○　M情報が運営を行っている主な団体
・救う会大阪　・NO！　民主「桜組」
・靖国神社に眠る御霊に感謝する会
・米国に原爆投下謝罪を求める会
・大阪の公教育を考える会
・スパイ防止法の制定を求める会
・外国人参政権に反対する会・関西
・日教組の違法行為を追及する市民の会
・竹島を奪還する会・関西
・改憲祈念の会

◇　前記口座、または同封の郵便振替にてご協力ください。

【ご支援等の口座】
郵便振替　00980 8 245547 MASUKI情報デスク
三菱東京UFJ銀行 千里中央店 004349 普通 増木重夫

原稿・同封資料の募集について

弊会『M情報活動報告』は、現在のところ毎月月始めに全国約５千（目標１万）部発送しております。掲載ご希望の論文、情報等ございましたらどんどん表記事務所までお送りください。また、弊紙は郵メールで発送しています。重さ制限は５０gです。まだ余裕がございますので、資料等の同封が可能です。ご相談ください。

諸情報のメール配信について

弊『M情報』では、日々、全国各地の仲間から、または情報収集の専門家から情報が送られてきます。それをメールで転送します。内容はどこよりも詳しく多種多様。「量が多過ぎとお叱りを受けるのですが、試しに一度受信してみてください。ご不要でしたら即停止いたします。要領は次のアドレスに「メール希望」と空メールを（発信名義「NPO 法人百人の会」）。h100prs@oregano.ocn.ne.jp